

## 地域と共に95年 これからの地域を考える

岩波 寿亮  
(スワテック建設株式会社)  
取締役 会長



弊社は長野県諏訪市に本社があります。こんな建設会社が一地方にある、そんな話になりませんか。現在95期、創業・創立が大正15年、当初から株式会社という建設会社です。自分で言うのもおかしいですが、創業の在り方が珍しい、地域に根差した建設会社です。私が入社した頃は、会社の年度と、昭和何年度という数字が同じでした。(つまり今年は昭和で言えば95年となります。)

さて、その大正15年当時の上諏訪町（現在は合併後諏訪市）で、上諏訪町役場の新築というのが話題に上りました。それを、鉄筋コンクリート造とはいえ、都会から建設会社を呼ぶのではなく、自分たちで建設会社を創り、請負をしようじゃないかということで、町の人たちが興した会社が弊社です（創立時の社名は諏訪建築株式会社）。諏訪には立川流の伝統を受け継ぐ宮大工が大勢いて、また今の時代に言っても分かる範囲で言うなら宮坂醸造とか竹屋味噌とかを興した事業家がいる、そんな人たちが31人で出資して創業創立した会社です。その後増資の都度、社員や取引業者等に株を持ってもらうことを繰り返し、今では資本金9200万円、160人を超える株主がいます。そんな建設会社ですから、新卒のリクルートの時は、誰でも頑張れば社長になれる会社という説明をしています、一般に地方の建設会社と言えば同族企業が多く、こうした非同族会社はそれ程多くはないのではないのでしょうか。

さて、近年地球温暖化の影響によりゲリラ豪雨や豪雪災害が頻発し、常に地域の災害への対応に待機している場面が増えています。最近の著しいデジタル化、スマートフォンや位置情報により社員一人一人が発注者と直接連絡・対応できるようになりましたが、以前は固定電話しかありませんでしたから、会社には休日も必ず宿直、日直が待機して（宿直室があった）、24時間、国交省、県、市等の官庁と一時たりとも連絡の取れない瞬間がないようにする必要がありました。その上で国道、県道、市道等の除雪要請には即対応できるよう、夜間でも自然と社員が集まって要請があれば即出動できるよう準備していました。現在でも休日や夜間であっても、ゲリラ豪雨や台風の進路によっては、誰も言わなくても社員が自然と本社に様子を見に来ます。

地域社会に必要とされる会社でありたい、そんな社員（人財）でありたい、そんな理念のも

と地域と共に歩んできた会社です。しかしこうした地域に密着した会社の発展は、地域の発展と歩みを同じくするということになります。地域の発展なくしては会社の発展もあり得ません。

諏訪地方は諏訪湖周と八ヶ岳山麓からなります。ほぼ日本の中心に位置し、フォッサマグナと中央構造線の交差するところに諏訪湖があります。そこに温泉という観光資源もあります。古くは黒曜石の原産地、縄文文化の中心ともいわれていました。また諏訪大社を中心に御柱祭というお祭りが6年に一度催行され、最近では観光資源にもなっています。近代では養蚕業、製糸業の発展により片倉製糸を代表とする多くの製糸場が営まれ、その製糸の機械の改良やメンテナンスが工業の発展の基礎を築き、多数の起業家を輩出したといわれています。戦後、製糸業の代わりにそうした工業が、時計・カメラ・オルゴール等の精密業へと発展し、東洋のスイスと言われた時期もありました。そうした変遷を経て、諏訪地域は、超精密微細加工の集積地へと発展してきました。

私は少し前ですが、地元の小学生に諏訪の産業の歴史について授業を持つことが何度かありました。その中で、いつも言ってきたことがあります。いくつかの企業についてや、それらがいかに努力をして製糸業から精密工業に変化を遂げたかもありますが、諏訪のような県庁所在地の長野とかまたその次の都市ではないのに、大変珍しいものがある。そのことが諏訪の産業の歴史を象徴している、ということ。つまりそれは、商工中金であり、税関であり、JETROがこの諏訪地域に存在することです。商工会議所等を通じて、先達のかかなりの働き、誘致活動がなされたかもしれません。しかし、確かにこの一地方都市圏の存在価値を象徴しているものと言えるのではないのでしょうか。

そして諏訪地域の企業家は、次へのステップを模索する中で「諏訪圏工業メッセ」を開催しました。内陸部最大級のものづくり展示会です。残念ながら、これが今年はコロナ禍で中止になりました。しかし、オンラインでの展示会、商談会として開催しています。

さて、話をもとに戻しますが、地方の、地域に根差した建設業も、地域とともに歩んでいます。地域が強くならなければわれわれ建設業も先がありません。観光資源を中心にしたホテル旅館や飲食業、精密微細加工を中心に集積しているものづくり産業も同様に、他の地域との生存競争をしています。弊社も含め、すべてのどんな会社もコロナ禍でいかに生きるか、いかに変化し生き残るかを必死で模索しています。弊社は弊社の、それぞれがそれぞれの強みを生かしながら、地域とともに、地域ですべての業種が協力することを求められている時代が、まさに今なのではないのでしょうか。移住・二地域居住・ワーケーション・交流人口等の言葉も使われています。

今、地域の若手経営者が中心になり、この地域の将来のために何ができるか、何が必要かを模索する中で、諏訪湖・八ヶ岳を網羅する地域の連携と観光資源の活用、環境問題、SDGsの啓発等について、トライアスロン大会の開催を出発点に出来ないか、と動き始めています。若い力のこうした活動が地域に活力をもたらし、連携力を高め、地域が発展し、全ての業種、企業そして地域の発展、活力が回りまわって、弊社の将来に役立つことに期待しています。

最後に、95年前に弊社を創業した先達も、もしかすると今私がここに記したことと同じ思いで創業・創立したのかもしれない、そんな思いを感じています。